

漢文訓読文における品詞分類について

國金海二

序

中国大陸から漢字・漢文が日本に渡来してきたことは、わが言語・文学・思想などにはかりしれないほどの影響を与えた。西欧文化の洗礼を受ける以前のが国の精神生活・社会生活を考えるうえに漢籍を除くことはできない。その漢籍を読解するために、われわれの祖先はほとんど訓読という方法を用いた。

訓読するにあたって、当初はまだ語という概念もなく、それを類別する意識もなかったであろうが、言語としての性格の異なる漢籍を訓読するうちに、彼此の違い（特に助字、またはテニヲハなどについて）を感じ、正確な読解のためには語を類別することの必要を痛感しだしたに違いない。

本論は、訓読に際して、語をどのように分類したかを江戸時代までについて概観するものである。

(一) 中世以前の語分類

わが国に漢文がいつ渡来したかは明確でないが、『古事記』『日本書紀』に記述されている応神天皇の条の記事を公的な漢籍伝来を示すものとするならば、それは五世紀のはじめ頃と考えられる。

伝来当初、漢文はどのように読まれたかについては明証はない。しかし当時の人々にとっては外国語文である漢文は、音読され、翻訳という形で取置かれていたはずである。

そして奈良朝末期・平安朝初期までには、日本語とは言語の系統も性質もまったく異なる漢文を、その表記のまま日本語の語法に適用するように逐語的に読み下す訓読という方法を考え出した。

訓読による漢籍の読み方は、学問の中心である博士家では秘説として固定し伝襲され、権威あるものとされていた。従って、その読み方について疑問をもたれることもなく、見なおしもあまりされることはなかった。（もちろん、文法という概念もなく、一語一語についてその文法的機能を考えることもほとんどなかった）

しかし、平安末期から鎌倉初期にかけて、日宋禅僧の往来がはげしくなるにもなつて朱子学がわが国に伝えられ、新注による經典の読みなおしも行われるようになった。

この間の事情を、応永二十七年本『論語抄』¹⁾（一四二〇年以前成立、称光天皇、五条為綱書写）の「為政第二」の次の章によってみてみたい。

哀公問曰、何為則民服。孔子対曰、拳直錯諸枉、則民服。拳

枉錯^二諸直^一、則民不服。

『論語抄』には

挙直トハ正直ノ人ヲ云。直ナルヲハ官位ニ挙テ邪佞ナル人ヲハ打捨テ置ケハ、自民上ニ版服スルナリ。挙枉——邪佞ヲ官位ニ上テ正直ノ人ヲ打捨テ置ハ不^レ服ナリ。……朱晦庵ハ諸ハ衆ナリト注シテ置字トハ不見ナリ。モロく^レ枉レルモロく^レノ直キト見タソ。或説ニ諸ハ之於ノ心ナリ。之於ノ二字ノ心ヲ一字ニ含セテ諸ノ字ヲ書リ。之於ノ切ハ即諸ナリ。錯^二之於枉^一上ト云心ナリ。とある。

すなわち、古注『論語集解』(包咸曰、錯、置也。挙^二正直之人^一用^レ之、廢^二置邪枉之人^一、則民服^其上^一)に基づき、「諸」を「於」「乎」などと同じように置き字(訓読では不読の前置詞)とする解釈「正しい人を登用して不正な人の上に立てれば、人民は服従します。不正な人を登用して正しい人の上に立てれば、人民は服従しません。」と、新注『論語集注』(錯、捨置也。諸、衆也。)による解釈「正しい人を登用して多くの不正な人を捨て置いたならば、人民は服従します。不正な人を登用して多くの正しい人を捨て置いたならば、人民は服従しません。」とを併せ記し、外に、「諸」を「之於」の合音字とする考え方を紹介している。

これは、「諸」を「前置詞」とみるか、「連体修飾語」とみるか、「代名詞+前置詞」とみるかによる解釈の違いを述べているのである。一語もゆるがせにしない、語への強い関心を示すものである。

また、この時代以後、朱子学を信奉する学僧、学者たちの助字への関心——ひいては語への関心は次のように高まっていた。

○「四書集註」をはじめて講じたとも言われている不二庵岐陽方秀

(一三六一—一四二四)は

文字読ミヲハ、無^レ落^一字様ニ、唐音ニ読ミ度也。其ノ故ハ、偶^一一句半句、ソラニ覚ユル時、ヲキ字、不^レ知^レ有^二其何字^一也。口惜哉。と言ひ、わが国では「ヲキ字」としているが、それにも他の語と同様に何らかの意味があり、無視してはならないと主張するのである。○岐陽の弟子である一条兼良(一四〇二—一八一)は、その著『大学童子訓』に、章句序の「然其氣質之稟、或不^レ能^レ齊。是以不^レ能^レ皆有^二以知其性之所^レ有而全^レ之也^一」における「而全之」の「而之」の二助字を読み落としてはならないことを

本註ニ、「而」ノ字ナトノヤスメ詞ヲ、訓ニハ読マス。新註ニ点ヲ加ハ、語助ノ字ニテモ、ヨマル、程ノ辞ヲハ、悉ク読ヘキナリ。其故ハ、本経ヲハ、必ソラニ誦スヘキモノ也。其字ヲ落シテ誦ツレハ、ヤスメ字ノ在所ヲハ、ソラニヲホヘヌ、別ニ又文章ヲナス為ニモ益ナキ也。且ハ又ヤスメ字ト云ハ、皆詞ハ虚ナレトモ、ヲキ所ニヨリテ、体アル字ニナルナリ。今此「全之」ト云ル、「之」ノ字ハ、更ニ虚字ニアラス、上ノ其性之所^レ有ト云五文字カ、此「之」ノ一字ニ籠ルナリ。(中略、理由を細説)故ニ新注ヲ学ハン者ハ、一字ノヤスメ詞ヲモ残サス誦スヘキ也。

と述べ、「ヤスメ字(ヲキ字)」の読むべきことを主張し、さらに「而」は、意味のない「ヤスメ字」(虚)の場合もあるが、意味を有する字(体)となることもある。「之」は、「而」に比べればさらに体ある字であり、虚字ではない、と言っている。

これは、語を「虚」と「体」とに分けており、語分類を意識したものであろう。

○江戸時代の訓読法に最も大きな影響を与えた桂庵玄樹(一四二七—一五八〇)は、その著『桂庵和尚家法倭点』(一五〇一年成立)で次のように述べている。

而字。……新註ニ、此而字、而毎字、如此点。其故、古点不
読ヲク故ナリ。学而時習之。此一句、論語首篇之篇首五字皆肝
要字也。争可不読乎。古点ニ、マナンテトキニ、ナラフト、ハ
カリ読テ、而之両字不読、曲事也。

樂字。依韻音訓カハルナリ。タノシミノ時ハ、音洛。葉鐸韻也。
音楽ノ時ハ、覺韻也。不音如レ字。ネカフノ時は、音効。去声。
効韻也。此外依韻依レ声、又依鉢用、字音訓カハルナリ。
鉢トハ、人也。人鉢是也。用トハ、人能知才去、万事所作是
也。山、鉢也。山ニ生ニ長草木、山用也。

治字。国治、自然ヲサマルハ、鉢也。治国、人所作、用也。鉢
ノ時ハ、治ノ字去声。用ノ時ハ、平声也。

食字。イ、ト云時ハ、鉢也。音嗣。クラフト云時ハ、用也。音シ
ヨク。

しこでも岐陽・兼良と同じように、助字は肝要であり読むべきで
あると言ひ

①「樂字」の項では、音によつて語意の変わることに、語に「鉢」

(実体)と「用」(その作用)とのあることを述べている。

②「治字」の項では、「鉢」(ヲサマル―自動詞)と「用」(ヲサム
―他動詞)とに分ける。

③「食字」の項では、「鉢」(イ、―名詞)と「用」(クラフ―動詞)
とに分類している。

①のように、語のはたらきに、実体と、その作用があるとするのは、
主語・述語による分別とも考えられるがこの一例だけでは判然とし
ない。②③の自動詞・他動詞によるもの、名詞・動詞によるものは
現在でも通用する分類法である。

なお、『家法和点』は、主に新注による訓読法について述べられて

おり、江戸時代にはいつて朱子学が盛行するにもなつて次々と刊
行(一六二四・四九・六九年)されているので、この分類法も人の
知るところとなつたであらう。

また、その頃中国から助字に関する専門書『助語辞』(元、盧以
緯、一三二四年以前成立、原名『語助』)が渡来してきた。その時期
は明確ではないが、寛永十八年(一六四二)には加點、翻刻されて
いる。

これは、朱子新注の理解を助けるために助字について簡略に解説
したものであるが、江戸時代の助字研究に大きな影響を与えた著作
である。語の分類については特に述べていないが、次に挙げるよう
に名詞・動詞を識別しており、語学者に及ぼした影響は大きいと思
われる。

所

亦指事為一而言。如_レ所_レ能_レ所_レ学_レ之類。比_レ于_レ字_レ所_レ指_レ之義絶不
同。所字活、于字死。

于是死字、故所_レ指_レ之事亦不_レ活。如_レ志_レ于_レ学_レ之類。但指_レ其事
耳。所是活字、若_レ曰_レ所_レ学、是明指_レ其習_レ学_レ之_レ而為_レ其事_レ也
同じ「学」の字でも「于」につけば死―名詞となり、「所」
につけば活―動詞となると言つのである。

(二) 江戸時代の語分類

江戸時代にはいり、朱子学が盛行した元禄・享保頃までは、新注
による助字の研究は朱子学者にとっては無視することのできない研
究対象であつたらう。

その後、古義学・古文辞学が流行するようになってから、助字の重要さに対する認識はますます深まり、「助語ハ文ノ關鍵ナリ、実語ヲ引マハスモノナリ」(荻生徂徠)とも言われるまでになり、それは必然的に他の語にも向けられるようになった。その結果、語を機能によって分類することが行われた。そのいくつかを著作に基づいてみていきたい。

1 伊藤東涯の語分類

東涯(一六七〇—一七三六)には、『助字考』二卷、『用字格』五卷、『操觚字訣』十卷、『同補遺』五卷などの漢語法書がある。

『助字考』の「序」では次のように述べている。

文字有^テ虚実、而実為^レ主虚為^レ賓。天地日月山川草木、字之^ナ実者也。覆載照臨流峙生榮、字之^ル虚者也。所^レ以^テ道^ニ實主之際、通^{スル}虚実之用^ト者、其助辞乎。

これによれば、「天地日月山川草木」などを「実」、「覆載照臨流峙生榮」などを「虚」としており、「実」は名詞、「虚」は動詞である。それ以外の語を「助辞」として、語を三つに分類している。

なお、本書における助辞とは、本文の「也夫」「也矣」など、句末に用いる二語以上連用の語(現在の分類で後置詞。以下、現在の分類は↓で示す)だけでないことは、巻頭「助語義」の項に「也」「矣」など句末の助字の解説とともに、「夫」「之」「雖」「而」(↓接続詞・助詞)などの語についても解説していることからわかる。

また、『操觚字訣』の「字例」には次のように述べている。

凡文字、而於乎哉類、助字トイフ、文章ノテニハナリ、嗚呼如何稍亦ノ類ヲ語辞トイフ、文章ノコトハ字也、命スル見ル行クノ類、ハタラキニナル字ヲ虚字ト云、天地日月命令ノ類ヲ実字ト云、ソノカタチアルモノナリ

ここでは、次のように四分類している。

助字…文章ノテニハ(而・於・乎・哉) ↓接続詞・前置詞・後置詞

語辞…文章ノコトハ字(嗚呼・如何・稍・亦) ↓感動詞・副詞

虚字…ハタラキニナル字(命スル・見ル・行ク) ↓動詞

実字…カタチアルモノ(天地・日月・命令) ↓名詞

次に、その本文をみると、次のように注を加えて語を、語辞・虚字・雑字・実字の四つに分けて収載している。

語辞…文章ノ語辞、及ビ虚字ノ語辞ニ近キモノ、或ハ虚字ノ和訓ニテ、語辞トナシテ読モノ

虚字…虚字ノ人事ニアツカル類

雑字…虚字ノ人事ニカギラズ、広ク用ユル文字、又ハ実字ノカル

キモノ等

実字…(特に注なし)

収載されている語をみると、虚字・雑字はともに広く動詞・形容詞を集めており、実字は名詞のことである。

語辞については、諸例を挙げると

○嘗・甚・敢 ↓副詞

○則・乃・抑 ↓接続詞

○嗚呼・於乎 ↓感動詞

○使・可・被 ↓助動詞

○於・于・乎 ↓前置詞

○哉・耶・乎 ↓後置詞

のごとくであり、これらは「字例」における助字・語辞を合わせたものに等しく、「字例」と本文とを合わせ考えると、語は三つに分類されている。

これは『助字考』と同じであり、図式化すると次のようになる。

漢字 実字
 虚字 (『字訣』 本文の雑字を含む) → 動詞・形容詞
 語辞 (『字訣』字例の助字と語辞、『助字考』の助辞) ↓ その他
 なお、『操觚字訣』字例における「助字」と「語辞」との区別は、
 助字は、実字・虚字以外の語で、置き字(原漢文にはあるが訓読し
 ない習慣となつてゐるが、日本語の助詞・助動詞などに相当する字、
 ほぼ現在の前置詞、後置詞など)とされたもの、語辞は、それを除
 いたものと考えられる。

2 荻生徂徠の語分類

徂徠(一六六六一—一七二八)には、『訳文筌蹄初編』六卷、『同後
 編』三卷、『訓訳示蒙』五卷などの漢語法書がある。

『訳文筌蹄』の「巻首・題言十則」には次のようにある。

是編、有「形状字面」有「作用字面」有「声辞字面」有「物名字面」
 詩家所謂虚実死活、即是物也。

また、「巻首・凡例三則」では次のように述べている。

是編部目。有「半虚字」、即題言中所謂形状字面是也。有「虚字」、
 即所谓作用字面是也。有「実字」、即物名字面是也。有「助字」、即
 声辞字面是也。

これによると、徂徠は語を次の四つに分類していることがわかる。

半虚字(形状字) ↓ 形容詞

虚字(作用字) ↓ 動詞

実字(物名字) ↓ 名詞

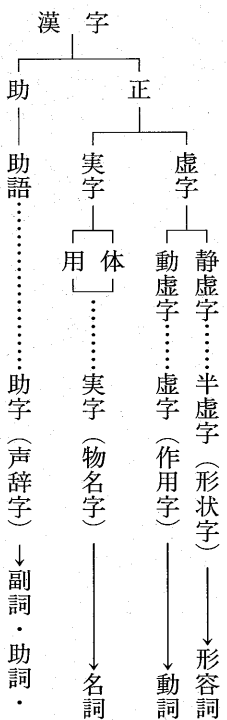
助字(声辞字) ↓ 副詞・後置詞・助詞

右のうち、助字の現代における分類は本文中の次の語の説明によ
 った。

「更」平声ノ時タガヒニトヨム、入レカワル意ナリ、然レドモ、

カワルトヨム時ハ虚字ニテ、タガヒニトヨム時ハ助字ナリ
 「已」助語ニ用ル時、上ニ置ケバステニ、下ニ置ケバノミトヨム
 ニテ語ノ筋知ルルコトナリ
 「来」助語ニ用ユルコト有、莊子ノ中ニ多シ、孟子ニ盍帰乎来、
 又淵明カ帰去来ノルイナリ(『後編』)
 徂徠は、『訓訳示蒙』の中では、次に記すように虚字を「静」と「動」
 に分け、実字を「体」と「用」とに分けたうえで、「虚字」と「実字」
 を合わせて「正」とし、「助字」を「助」とする分類を行っている。

字義ノ大綱ヲ云ニ、字品字勢ト云コトアリ、字品ハ字ノ元来ノ
 種姓ナリ、字勢ハ字ノナリフゼイナリ、字品トハ虚実正助ノ四ツ
 ナリ、虚字トハ大小長短清濁明暗喜怒哀楽飛走歌舞ノ類也、此ノ
 内ニ動ト静トアリ、静ノ虚字ハ大小長短清濁明闇等也、動ノ虚字
 ハ喜怒哀楽飛走歌舞等ナリ、実字トハ天地日月鳥獸草木手足頭尾
 枝葉根茎等ノ字ナリ、此ノ内ニ体ト用トアリ、天地日月鳥獸草木
 等ハ体ナリ、手足頭尾枝葉根茎等ハ用ナリ、虚実トモニ正ナリ、
 正ノコトヲ実語トモ云、助ハ助語ナリ、之平者也矣焉哉ノ類ナリ、
 正ハ語ノ正味、助ハ倭歌ノテニヲハ也、正ノ助ニナルモノナリ
 これと『訳文筌蹄』の分類とを参照してみると次のようになる。



これをみると、徂徠は語を大きく「虚字」「実字」「助語(助字)」
 の三つに分類していることがわかる。

これは前述の東涯の分類と同じであるが、徂徠は虚字、実字を「正」、助語を「助」とし、はっきりと対立関係としている。現在の自立語と付属語（副詞をここに入れるなどの例外もあるが）との関係とほぼ同じである。

また、虚字を静虚字（形容詞）と動虚字（動詞）とに分けたのも新しい考え方による分類であるが、中国には、これ以前、明代にこのような考え方があった。

すなわち、明代の著作『対類』¹⁰（著者不明）には次のように述べられている。

蓋字之有「形体」者為「実」、字之無「形体」者為「虚」、似「有」而無者為「半虚」、似「無」而有者為「半実」、実者皆是死字、惟虚字則有「死」有「活」。死謂「其自然」而然者、如「高下洪纖之類」是也。活謂「其使」然而然者、如「飛潛變化之類」是也。

ここでは、まず語を実字と虚字とに分け、さらに虚字を「死」と「活」に分類し、前者を「自然の状態を表すもの」、後者を「ある状態にさせるもの」とし、語例として「高下・洪・纖」「飛・潜・變・化」などを挙げている。

これは虚字を現在の形容詞と動詞とに分類したもので、「死」は徂徠の言う「静虚字（形状字）」に、「活」は「動虚字（作用字）」に当たるものである。

徂徠の分類法が『対類』の影響を受けていたか否かは不明であるが、江戸時代には前述の『助語辞』をはじめ助字に関する著作が中国から渡来しているので参考にした可能性はある。

3 皆川淇園の語分類

淇園（一七三四—一八〇七）には、『太史公助字法』二卷、『左伝助字法』三卷、『詩経助字法』二卷、『助字詳解』三卷、『虚字解』二

卷、『統虚字解』二卷、『虚字詳解』刊本部分十五卷、『実字解』三卷、『実字解』二篇』三卷などの著作がある。

語の分類について特に述べてはいないが、『助字詳解』総論において次のように言っているので、実字・虚字・助字の三つに分類していることがわかる。

凡字義、実字ハ知り易ク、虚字ハ稍難シ、虚字ハ虚ニシテ、タダ其模様ノミアリテ、人ノ心ニソノサマヲ持チテ後ニ、知ルベキ故ナリ、助字猶更其虚字ヲ以テ、物若ハ事ノサマヲ形容スルニ付ケテ、其ヲ聞ク人ノ心ニ、ソレヲ持チ思フ処ニツケテ、其ソレヲ持チテ思ヒヤフノ、心ノハツミヲ活シテ、思ハセントテ用ユル文字ナル故ニ、尤モ心ニ入り難キモノナリ

またこのことは、著作に『実字解』などと「実字」「虚字」「助字」の語を冠していることから分かるが、それぞれは語をどのよう分類して収載しているかをみる。

『実字解』——解説されている六百余りの語は名詞であり、「実字」とは名詞のことである。

『虚字詳解』——刊本部（ア部よりス部まで）をみると、解説されている語は動詞・形容詞などであり、なかに「内・中・裏衷」「心・意・情・性」などの名詞、「嚮・先・曩・前・日・往」「切・仍・連・類・累・急・荐」などの副詞がいくつか混入されているが、「虚字」とは動詞、形容詞を指している。

なお、すべての語は五十音順に採録されており、動詞・形容詞の区別はない。

『助字詳解』——ここには、次に記すような実字・虚字以外の語のみが解説されている。

○豈・必・頗・聊↓副詞
○而・則↓接続詞

○可・使↓助動詞

○之・者↓助詞

○於・于↓前置詞

○也・矣↓後置詞

なお、『太史公助字法』には、「何・安(代名詞)」、「嗟乎・於戲(感動詞)」も収録されており、淇園のいう助字とは、実字(名詞)・虚字(動詞・形容詞)以外のすべての語であるといえる。

〈参考〉

淇園に師事した松本愚山(二七五五—一八三四)には、『訳文須知』前集虚字部五卷、『訳文須知』実字之部四卷がある。

その「虚字部」が、動詞・形容詞と、若干の副詞(會・適・偶・遯・后・徐・漸・稍・浸・良など)、文物の名称に属さない名詞(命・性・寿、言・詞、辞など)を収録しているのは「虚字詳解」と同じであり、「実字之部」の収録語が名詞であることも「実字解」と同じである。

愚山には助字についての著作はないが、「虚字部」の序(外山成周識)には「業師平日教誨諸生、必以三識一別一字義……前年日課数十字、以口授解詰。乃自虚字始、而実字、而連熟、而俗語、訖於助字而止。」とあり、これらから類推すれば、愚山も「実字」「虚字」「助字」の三分類である。

淇園には公卿諸侯をはじめ弟子三千といわれており、その分類法は広く知れたであろう。

4 岡 白駒の語分類

白駒(一六九二—一七六七)には、『助辞訳通』という漢語法書がある。書名の通り助辞について自説を述べたものであるが、それ

を通して語をどのように分類していたかをみたい。まず、その冒頭に次ように述べている。

凡文章ノ助辞ハ、此方ノ、テニヲハノ如シ、故ニ矣焉ノ類ニ、ツクベキ和訓ナシ、亦此方ノ、テニヲハニ擬スベキ文字ナシ……助語トハ正語ヲ助クル辞ナル故ニ、助語ト云フ、論語ニ、孝弟也者、其為仁之本、此十字ノ内、孝弟為仁本ノ五字正語ニテ、其余ハ皆助語ナリ、又句頭ニ在ルヲ発語辞トモ云フ、語辞トモ云フ、此モ皆助語ナリ、夫字、乃字、其字ノ如キ、句頭ニ在ル時、発語ノ辞トス

ここでは、語を「正語」と「助語」とに分けており、正語は、名詞(孝・弟・仁・本)と動詞(為)であり、それ以外はすべて助語としている。ただ句頭にあるもの(夫・乃・其など)を特に発語辞(語辞)として区別しているが、やはり助語であるという。

この「正語」という術語は、ここに用いられているだけであるが、本文中では次に挙げるように名詞と動詞とを含む語を「実語」としているのので、「正語」と「実語」とは同じ概念の語であると考えられる。

○所字、二用アリ、実語ニ用ルトキハ、其場所ナリ方角ナリ〔所〕の頃)

○幸字モ実語ニ用ル……非分而得曰幸ト注ス、本得又ハツノ事ヲ得、本免レヌハツノ事ヲ免ルルヲ幸ト云フ〔幸〕の頃)

○古文ニハ以ヲ用字ト同ク実語ニ用ヒタルコトアリ、論語ニ、不使三大臣、怨乎不_レ以_レノ如キ是ナリ〔以〕の頃)

○庸字、用ト訓ズ、モツテト読テ助辞ト意得ルハ非ナリ、用ト訓ズルトキハ実語ナリ、助語ニ非ズ、用字ト義同ジ〔庸〕の頃)

以上のように白駒は、語を実語(正語)と助語(語助・助辞とも)に二分類しているが、実語を、いわゆる実字(名詞)と虚字(動詞・

結 び

以上、中世以前の語分類と、代表的な漢語法書に基づいての江戸時代の語の分類を概観してみたが、特に語に対する認識の深まった江戸時代に関して、次のいくつかのことが言えよう。

1 分類について

語を、実字・虚字・助字（助辞・助語とも）という術語を用いて三分類することは、江戸時代中ごろまでにはほぼ定着していた。（一七七九年刊『助辞鶴』凡例には、この分類について「世人ノ知ル所ナリ」と言っている）

しかし、『訳文筌蹄』凡例三則には、語の分類について記した（前記）後に続けて、その明確な区分は不可能であることを次のように述べている。

但だ是の編の主意、元と同訓異義の弁に在るときは、則ち同訓に牽かれて、虚或いは半虚に入り、半虚或いは虚に入り実に入る。助字又た虚に入る者、往往にして之れ有り。而も終に逐一精選して以て本類に従ふこと能はざる者、是れが為の故なり。観る者其れ諸を察せよ（原漢文）

これが、江戸時代の語学者のいつわらざるところであろう。このことは、分類に関して最も完成度の高いとされる淇園にしても、たとえば、前述の『虚字詳解』への名詞・副詞の混入などの外、存在詞といわれる「有」「在」を虚字としたり（『虚字詳解』に収載）、助字としたり（『左伝助字法』『詩経助字法』に収載）していることからもうかがえる。

2 術語の混乱について

漢語法書のなかで、助字・助辞・助語などと種々の術語を用いるのは、特定の場合を除いては著者の恣意によってであろう。

しかし、それらを『助辞鶴』のように「虚字」と呼ぶことがある。また、中国から渡来した助字の専門書には『虚字啓蒙』（王潤洲著）『虚字註釈』（張文炳著）などと「虚字」と冠したものが多い。

これは、中国における分類は、語を実字（名詞）と虚字（その他）に分け、さらに虚字を虚活字（動詞）と虚死字（その他）に分けるのが主流のようであり



虚死字を単に「虚字」とも言っているからである。

この虚死字（虚字）は、わが国でいう助字・助辞・助語にあたり、ここに混乱が生じたのである。

ちなみに、日本には語をこのように二類別する考え方はなく、二類別するときは「正」と「助」との関係でとらえているが、これは「実」と「虚」という語自体に対する解釈の違いによるものと考えられる。

3 徂徠の語分類Ⅱ

徂徠は、実字を全体を表す「体」と、部分を表す「用」とに分けている。このような実字内での意味上の分類は中国にも見られず、文法的には異質のものであるが、分類する理由と基準などについては何も述べておらず説明できない。

ただ、名詞（実字）を「体」（本体）と「用」（本体に付属すると考えられるもの）とに区分するということは、二条良基（一一三二〇—一八八）の連歌学書『連理秘抄』（一三四九年成立）に

山体

岡 峯 尾 上 麓 坂 岨 谷 鳴 山の関 以上如^キ此^レ類、
体也

同用^{シテ}

梯 滝 柚木 炭竈 已上如^キ此^レ類、用也

とあるように、連歌では以前より行われていた。

また、徂徠は虚字を虚字（動詞）と半虚字（形容詞）に分類しているが、その著『訳文筌蹄』では分けることなく収載しているが写本で伝わる国会本『訳文筌蹄後編』¹⁹（著者名、筆写の年記・氏名などなし）には、「訳文筌蹄死虚字上目次」とあり、この「死虚字」は『対類』でいう「死」（徂徠の半虚字・静虚字）に当たるものと思われるが、ここでもやはり分類されずに混載されている。これは分類を意図したとも思われるが辞書的性格をもつ本書では分類の必要はなかつたからであろう。

4 日本語分類への影響

徂徠が虚字を二つに分けて静虚字（形容詞）と動虚字（動詞）とし、語を実字・助字（助語）とともに大きく四つに分類したのは、その後、鈴木眼（一七六四—一八三七）が『言語四種類』（一八二四年刊）において、日本語を「体ノ詞」「形状ノ詞」「作用ノ詞」「テニヲハ」と四つに区分したのと一致している。徂徠の語分類の考え方が深く関わっていたと考えられる。

また、東涯が『操觚字要』字例において、語を実字（名詞）・虚字（動詞・形容詞）と、それ以外の語と区分した「語辞」を、「助字」（前置詞・後置詞など、日本語の助詞・助動詞にあたる語）と「語辞」（副詞・感動詞にあたる語）とに二分し大きく四分類したのは、富士谷成章（一七三八—一七九）が、語を「名」（名詞）・「装」（動詞・

形容詞）・「挿頭」（副詞・感動詞など）・「脚結」（助詞・助動詞など）に四区分したのと類似している。

なお、兄の淇園の漢語分類法が成章の学問に影響を与えていたであろうということは先学の説くところである。

〔注〕

(1) 中田祝夫編『抄物大系』、応永二十七年本『論語抄』（勉誠社）による。

(2) 『桂庵和尚家法倭点』（静嘉堂文库蔵）に「不二和尚曰」として述べられている。

(3) 足利衍述著『鎌倉室町時代之儒教』（日本古典全集刊行会）による。

(4) 『国語学大辞典』（東京堂出版）による。

(5) 『漢語文典叢書1』、『新刊助字考』（汲古書院）による。

(6) 『漢語文典叢書5』、『操觚字訣』『同補遺』による。

(7) 『荻生徂徠全集2、言語篇』（みすず書房）による。

(8) (7)と同じ。

(9) 日本語の分類においても、副詞をテニヲハに入れることは行われている。たとえば村上織部（生没年未詳）の『古今集和歌助辞分類』には「助語の辞」として、「また」「なほ」などの副詞が解説されている。

(10) 鄭奠・麦梅翹編『古漢語語法資料彙編』（中華書局、一九六四）によつた。

(11) 「勉誠社文庫43」、『助辞詳解』による。

(12) 「漢語文典叢書5」、『実字解』による。

(13) 「同」4、『虚字詳解』による。

(14) 「同」6、『訳文須知』による。

(15) 「勉誠社文庫59」、『助辞訳通』による。

(16) 「 同 73 74 、『助辞鶴』による。

(17) (10)と同じ。

(18) 中国においても、ことさらに断らなければならないこともあるよう
で、清の王鳴昌の『弁字訣』には、「蓋一句中、必用『虚字』以為『襯貼』
或用『於句首』、或用『於句中』、皆曰『襯語』。先輩所謂助語是也」と
言っている。引用は(10)と同じ。

(19) 『漢語文典叢書3』、『訳文筆蹄』による。